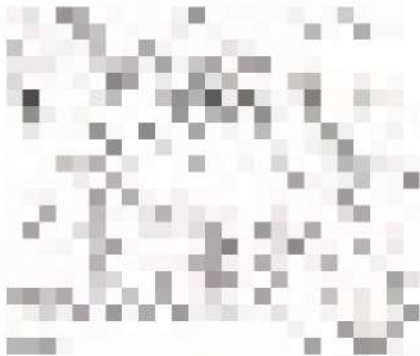


# Scramble Shot



20年ぶりにスイスを訪れ、アールガウ響を指揮した広上淳一（中央）とオーケストラのメンバー



Concert

## ● スイスのアールガウ交響楽団へ客演した広上淳一

「なぜ、スイスの地方オーケストラでスタンダードなヨーロッパの作曲家のプログラムを振りに、日本のマエストロが来るのか」という素朴な疑問を解き明かすため、広上淳一のアールガウ交響楽団への客演最終日、バーデンに出掛けた（11月18日・トラフォハレ）。

チューリヒ州の隣に位置するアールガウ州のこの楽団が、このところ伸びて来ている、と耳にしたことがある。そのせいもあるかもしれないが、まるで学生オーケのように目をキラキラ輝かせて、広上を迎える自信に満ちた楽団員のオーラが印象的だった。

《魔弾の射手》序曲は、リズムを効果的に用いて劇的效果を醸し出し、間合いの取り方もドラマティックではあったが、盛り上げた緊張感を継続させられずに萎んでしまった。しかし続くモーツァルトの「クラリネット協奏曲」は、なんと自由自在にフレーズを歌っていたことだろう。すべての楽想に色合いがあり、オーケ

の混沌の中から、主旋律を紡ぎ出して、それを膨らませて、自由に漂わせてあげる様は、虹色のシャボン玉を飛ばしているようだ。第2楽章のゆったりしたテンポでも、そのフレーズの浮遊感は失わず、方向性がある。ピアノシモでの緊張感の持続では、並みならぬ集中力を発揮していた。

休憩後のシューマンの「交響曲第1番」でも、冒頭では曲想が続いていかずに多少だらけたが、アッチェレランドの処理がすこぶるうまく、そのまま流れに乗っていった。的確なリズム感で完全に音楽の流れを手中にし、全曲が短く感じられたのは観客も同感のようで、惜しまれるように演奏を終えた。広上が再度、拍手に呼び出された時には、楽団員はしばらく起立せずに、喝采を指揮者に捧げていた。

20年ぶりの訪瑞を「呼んでくれることに感謝できる年齢に達したから」と分析する広上は、アールガウ交響楽団員に新鮮な音楽の息吹を蘇らせたに違いない。

（中 東生）

